

名小路明之



名小路明之 (なこうじ・あきゆき)

昭和18年11月、長野県松本市生まれ。平成12年、句作を始める。平成27年、「帆」に入会、浅井民子に師事。俳人協会会員。

私のロマンチック

私は仕事の関係から技術的な分野に偏りがちであった。五十年代半ばを過ぎた頃、文学や文芸に関わることの必要性を感じていた。

そのような時に業界で集まっていた仲間四人が意気投合し、懇親を深めつつ自主的に月二回程度集まり、俳句を互いに披露し添削しあった。年に二回ほど句集も纏めた。十年余り続けたが、退職し家に籠る人も出て活動は中断した。その後通信教育も受けたが、更に私は俳句の魅力にひかれ、友人の紹介で俳句会「帆」に入会し、現在に至っている。主宰の浅井民子先生や句友は、調子はずれの私に手を焼いているかもしれないが、本人は大真面目で続けさせてもらっている。

私の故郷は現在の長野県安曇野市である。父母から引き継いだ家は母の七回忌を過ぎてから処分した。安曇野には従弟も小・中・高校時代の友人達もいる。今後も交流を深めて行きたいと思っている。この人達は私の俳句の登場人物である。

東京にいて安曇野を思い、安曇野に行つて思うことも多い。田舎の生活、行事を今も続けている。

過去の話に飛ぶが、昭和十年代に著された『信濃二千六百年史』（信濃毎日新聞社）に、天武天皇時代に安曇野へ都を遷都する検討がされたと記されている。地域の民力・治安や文化が比較的高く、中央との繋がりが強かった可能性があったと示されている。ロマンに満ちた話である。美味しい水と空気と食材、変化のある地形、温泉や豊富な森林のある土地柄の故郷安曇野を表現して行きたい。

一方で、現在の住まいの武蔵野も良い。大都会に接しているが、まだ自然が残り太古の面影が残る。

この環境の中で、人間や自然のありのままの姿やそれぞれの交差する情景を、簡潔に表現することに注力し、俳句を詠み続けていきたいと思う。

通勤の階段春と駆け上がる

春来たる空也の口に六仏

あたたかや妹をなぐさむ姉のゐて

曜変の異彩や春の薄明かり

若冲の五彩の羽や春シヨール

生と死のねむりの中の母の春
足とられはたと転倒山笑ふ
内裏雛子の並びる御座の卓
剪定や後継ぎをらぬ果樹園主
いつのまに禽の餌となる白椿
のどけしや松風に乗る二羽の鳶

梅三分雨の雫の染まりけり
蒼天へ梅の香のたつ日和かな
親愛の握手ひかへる桜人
飛花落花病もつれて散るといふ
サッカーを応援の父母風光る
合格す子の挨拶の大人びて

旧街道野菜の棚に猫柳

平曲の朗朗ながる木の芽風

芝桜富士一山を引き立つる

よしやよしやと神の轍や御柱

妣の知恵闇に十薬干ししまま

垣越しに効きめ聞かるる蚊遣香

生きのびるための昼寝ぞ日曜日

地下世界問うてもみたき今朝の蟬

夏掛けや闇をしまひてねむらんか

紫陽花やときに色もの羽織りたき

夏至の野に日のおつるまで遊ばんと

威勢良き街の八百屋よ枇杷熟るる

たかんなの朝掘りと知る夕餉かな

鯉のぼり常念岳の風うまからむ

ほほゑみのミュシャの乙女やうすごろも

駒形の板の間に膳泥鱒汁

夏休み気温十度の地下空間

炎天や茹であがるとはこのことか

つながりて連峰となる雲の峰

とうすみの隅の小藪の住処かな

泥の手で蚊を打ちそこね夕日かな

犬眠る午後や涼しき通し土間

雨よけの傘をはみだす白牡丹

皇后の夏蚕育つや令和の世

月見草さゆらぎゆらぎ花開く
朝風や孫の浴衣の掛かる居間
青しぐれ禽くちばしで翅ぬぐひ
故郷の思ひ出尽きぬ長夜かな
これがまあ朝から待てる今日の月
この先は二輛列車や稲の国

蓑虫や餌は足るるか蓑の中
安曇野の伏せし濃霧の夜明かな
名月の静まる古都を照らしけり
西瓜市四軒まはり試し喰ひ
一年が虫の一生いま鳴けり
渡り鳥大転回の気力見せ

澤の音消えて峠や紅葉狩

溪流の岩とび渡る撫黄葉

子と囲む朝の食卓豊の秋

木曾谷のわづかな畑や蕎麦の花

曼殊沙華花芽伸び初む七日前

夕暮の身を尽くし鳴く法師蟬

五目並べ子に二度負くる残暑かな

涼新た寝返りてまた眠りけり

小伝馬の寂ぶる裏みち花桔梗

捨て水も命の水よ秋揚羽

安曇野の大地うるはし栗を食む

錦木の色重なりて浄土とも

道の駅ならぶバケツに秋の花

洋梨の熟るるしづくをのんどかな

秋の海車内に海の反射光

枕辺へ波のとよもす秋の旅

蝻螂の構へてゐたる草の先

髭剃りの切れ味にぶる残暑かな

阿波踊り鉦鼓一打に構へけり

遠富士の底に列車や冬紅葉

アルプスを越えて涌きくる雪の渦

冬の月雑木林の籬の中

月と日の弥次郎兵衛なる枯野かな

遠き日や下駄スケートの痛きこと

傘傾げあふ武蔵野の夕時雨
風花を吹き出す雲や麓まで
大寒を乗せて無口な列車かな
君の逝く旅の終着冬銀河
冬至の夜天球しかと動きをり
蒟蒻玉三年ものに土の精

安曇野の動くものなき寒の朝
子の恐る寒柝の列うすあかり
子の家の手作り味噌や今朝の味
安曇野や室の大根の白きひげ
逆光にかすかな湯気や霜の屋根
湯煙のなぞる廂に氷柱かな

谷からの風は時雨を豎縞に

安曇野の北に立ちたる冬の虹

時雨るるや小走りに行く日本橋

日暮まで野球する子の枯野かな

寒雀鉢の乾砂浴びにけり

故郷や野沢菜漬くる頃ならむ

鳥居出づ元朝の日矢満ちて来し

故郷への道はかはらぬ恵方道

太箸やこそよりつなぐこの命

繭玉の稔り象る妣の手よ

暁の福茶の恵みいただきぬ